

淡路市

山田地区遺跡Ⅲ

—(一)淡路友手遺跡改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010年3月（平成22年3月）

兵庫県教育委員会

淡路市

山田地区遺跡Ⅲ

—(一)淡神社手塚遺跡改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010年3月(平成22年3月)

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本調査は、波動村上郷に所在する山田地区道路（大庭道路・宇和田道路・七反田道路）の実地調査報告書である。
2. 実地調査日：（一）昭原江井郷道路改修・（二）高神安平郷道路改修事業に随伴つもので、実地調査時は土産地図紙上本署事務からの協議を受け、高神安平郷事務所が平成18年度に本実地調査を実施した。実地調査は、前川建設株式会社が請け負い、実施した。
3. 本実地調査は、兵庫県歴史委員会地理文化部調査委員會（当時：関西車輌立考古博物館）山田地区・道・里筋が担当した。
4. 調査後の空疎写真の撮影および開拓は、株式会社・ヨコハマタクシに委託して行った。他の構造写真の撮影・測量は調査組が実施した。
5. 整理作業日：平成21年度に兵庫県立考古博物館にて実施した。
6. 通路写真的撮影は、株式会社ロード・フォトに委託して行った。
7. 調査は、三角点をもとに三面標示点を設置しておこなった。座標は世界地図に基づくもので、調査地は第1号基準に統一する。
8. 本調査に用いた方位度量標記を示す。また、標識は東京水平地盤水準を基準とした。
9. 本調査で使用した通路番号は、通路ごとに呼称した。また、各通路は以下のように呼称した。
　　通路番号→S B、柱穴→P、土塁→S K、溝→S D
10. 第1回は、国土地理院発行1/5000地割図「河内」「明石」「播磨」を縮小複写した。第2回は、平成18年作成（平成18年改訂）一町町廓発行1/2000地割図を複写した。
11. 本調査に用いた通路番号は、通路ごとにつけ、それと日本文・西文・英語・仮名ともに統一している。
12. 本調査の範囲は18世紀の標記を除て山田が担当し、全て山田が執筆した。
13. 本調査はかかる道理・方法・通路図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
14. 最後に、実地調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御恩顧・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。
　　通上閣主、甲本智道、伊藤宏幸、大石龍一、星立勝久、坂口弘吉、宮延佳苗

目 次

| | |
|-----------|----|
| 第1章 はじめに | |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 4 |
| 第2章 調査の経緯 | |
| 第1節 調査の起因 | 7 |
| 第2節 確認調査 | 9 |
| 第3節 本検証調査 | 11 |
| 第4節 整理作業 | 13 |
| 第3章 調査の結果 | |
| 第1節 人道虐待 | |
| 1. 道路の状況 | 13 |
| 2. A地区の調査 | 13 |
| 3. B地区の調査 | 15 |
| 第2節 守秘性侵害 | |
| 1. 道路の状況 | 20 |
| 2. 調査の状況 | 20 |
| 第3節 七段階道路 | |
| 1. 道路の状況 | 23 |
| 2. 調査の状況 | 23 |
| 第4章 おわり | 29 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|----------------|----|------|------------|----|
| 第1図 | 被認定地の位置 | 1 | 第2図 | 大蔵道路本地区土石量 | 15 |
| 第2図 | 第一管町の位置 | 2 | 第3図 | 宇和田道路開発段階図 | 20 |
| 第3図 | 山田町C道路の立地 | 3 | 第4図 | 宇和田道路平断面 | 21 |
| 第4図 | 山田町C道路沿線（幅員から） | 4 | 第5図 | S-D-C断面 | 22 |
| 第5図 | 山田町区道路 | 5 | 第6図 | S-D-C断面 | 23 |
| 第6図 | 面積整理と工事計画 | 7 | 第7図 | S-D-C断面 | 23 |
| 第7図 | 工事計画と調査位置 | 8 | 第8図 | 宇和田道路土土量 | 23 |
| 第8図 | 被認定調査位置 | 10 | 第9図 | 宇和田道路土削削 | 24 |
| 第9図 | 調査前の大蔵道路目測図 | 11 | 第10図 | 竣工後の七知田道路 | 25 |
| 第10図 | 七知田道路の調査 | 11 | 第11図 | 七知田道路調査段階図 | 25 |
| 第11図 | 竣工後の宇和田道路 | 12 | 第12図 | 七知田道路基本土層図 | 26 |
| 第12図 | 竣工後の大蔵道路 | 13 | 第13図 | 冬目的 | 27 |
| 第13図 | 大蔵道路調査段階図 | 13 | 第14図 | 七知田道路平断面 | 27 |
| 第14図 | 大蔵道路A地区基本土層図 | 14 | 第15図 | S-D-C断面 | 28 |
| 第15図 | 大蔵道路平断面 | 15 | 第16図 | S-D-C断面 | 29 |
| 第16図 | A地区土石量 | 16 | 第17図 | 土石量 | 29 |
| 第17図 | A地区出土土量 | 16 | 第18図 | 七知田道路土土量 | 29 |
| 第18図 | 大蔵道路各地区基本土層図 | 18 | 第19図 | 江戸時代の往還 | 31 |
| 第19図 | 大蔵道路各地区出土土量 | 18 | | | |
| 第20図 | 大蔵道路各地区出土量 | 19 | | | |

圖 版 目 次

大庭遺跡

写真図版 1 遺構

A地区全層 壁から

写真図版 2 遺構

B地区遺構 壁から

C地区全層 壁から

写真図版 3 地上遺物

包内埋出土土器 (6・8=30=14・11)

包内埋出土石器 (8.1)

写真図版 4 地上遺物

包内埋出土石器品 (5.2=5.4)

七反田遺跡

写真図版 9 遺構

全層 南上空から 全層 北上空から

写真図版10 遺構

全層 北東から 西半層全層 壁から

写真図版11 遺構

東半層全層 壁から 8日目 壁から

8.D. 壁から

写真図版12 地上遺物

包内埋出土土器 (10)

包内埋出土石器 (8.1)

平和田遺跡

写真図版 5 遺構

全層 南上空から 全層 北上空から

写真図版 6

全層 南から 全層 北から

北半層全層 南から

写真図版 7 地上遺物

8.B.00出土土器 (1)

8.D.00出土土器 (2・3・5・8・9)

写真図版 8 地上遺物

包内埋出土金屬製品 (M.1)

第1章 山田地区道路

第1節 地理的環境

1. 道路の位置

山田地区道路（大蔵道路・宇都御通路・七反田道路）は、長野県道路西山田に所在する。道路名は、該区域の北部に位置して（第1図）、2003年4月1日に、波田町・北波田町・坂浦町・津久町・一宮町各町が合併してできた町である。町域の面積は約65km²と遼々、面積は町内面積を抜いて柿戸町・明石町と並んで大きい。また西側は種差原町、南側は大糸町に面している。町域の面積は約65km²と大きい、人口は4800人（平成20年2月現在）である。

山田地区道路は田一宮町に所在し、波路町のなかでも西側に位置する（第2図）。波路町のなかでは、西海岸の日吉中丸町にあたる。西側中幡宿場（柿戸内海）に面し、北側から南側にかけては丘陵地帯となっている。町域の面積は約65km²である。昭和50年10月における人口は4800人であった。

かつて律令時代には津若郡に配されており、

その面積が、西詔するように津若の郷家村間にあったと推定されており、津若郡の中心地であった。田一宮町西詔に波路第一ノ宮の津若神社があり、これが、當時の町名の由来である。現在では、西里・西里・津若製造業が主要な産業で、特に津若の生産は日本一で、全国の約半数を占めるほどである。そしてこれが、津若島の看板品の一つとなっている。

あるに、田一宮町は、交通の要衝としても重要な位置を占めている。田一宮町西詔において、波路町の西側を南北に走るルートと、内陸部に走るルートの結節点となっている。これは少なくとも江戸時代まで遡るもので、江戸時代にはこの郷家と湖あれど波路（田三原町）を通じて通が、田一宮町の中央を南北方向に走っていた（第3図）。この道路が律令時代まで遡るといつてももある。また、江戸時代には洋洋に連絡道路が設けられたことから、海上交通に関しても重要な役割を占めていた。

そして、この網走町に山田地区道路がある。西詔から北は直線的に約5km内陸部西側方面に入った地点にある。このように、山田地区道路の西側の山田地区は、田一宮町のなかでも西側に位置する。つまり、山田地区道路は波路町の西端部に位置し、西側は波路町五郎町（旧津若郡五郎町：平成20年2月に柿戸町と合併）と接している。

当町、一宮町は、海側方面は津若郡波路町、郷家町、多賀町、江戸町が合併してできた町で、道路が所在する山田地区は昭和40年と1年遅れて、一宮町に編入されている。当地域は農業を基盤とし、耕作とみかん栽培が盛んである。ただし、平地はわずかであるため、当地は畠畠を標榜が形成されている。



第1図 波路町の位置



図2図 山田町の位置

2. 地形的環境

山田町の地形は、北面・中面・南面と大きく3地区に分けることができる。北面は高岡原から構成される山地が北東～西北方向にのび、その北西側は山腹斜面があり、その山腹斜面の南縁に日高筋と音波が分岐している。中面は、高岡原からなる丸山（標高148m）を中心にして複数の尾根が発達している。南面は、中央横通筋の北側に沿って和泉方面から構成される山腹斜面地帯が発達している。

山田町の道路の所在する山田一宮町は、上記の中間に位置し、道路網は丘陵が東西に発達した地盤である。特に通林地帯は標高140m以下の低丘陵からなる。丘陵の東側でも、やや高い箇所は見附山地からなり、それ以外は大河原原から構成されている。そして、この丘陵地帯にはいくつかの小河原があり、これら小河原を中心によくの小谷筋が谷底平野が形成されている。ちなみに、当時は通林地帯にあたるため保水量が少なく、これら小谷・谷底平野の多くは砂漠である。このため、山田町内に日向の香組れる通路用地が造られている。

山田町内に手数存在する谷底平野の一つが、山田地区通林が所在する山田盆地である。詳細になると、山田盆地の東側から山腹斜面地帯がかかる東面、西側にかけての丘陵は大河原原からなり、西側から西北側にかけての丘陵は山腹斜面地帯からなる。

山田盆地は山田川を中心として、その上流域に形成された盆地である。南側から北西方向に開けた盆地で、その面積は300m×800mを測りその面積は約2haである。山田町は、通林と山田川谷底を隔て二級河川である。山田盆地は北通林盆地北端で西方に広げ、大きく平行を画り直し、高山・草原を経て通路（通路下河原）に注いでいる。河原底は砂地である。

大通路と七段通路は山田町の高率に、平林通路は看板に分離している（図3図）。具体的には、大通路、宇和原通路、七段通路は、山田川に沿った平林地から丘陵地への通路に立地している。この通路は山腹斜面よりはやや西に位置していている。

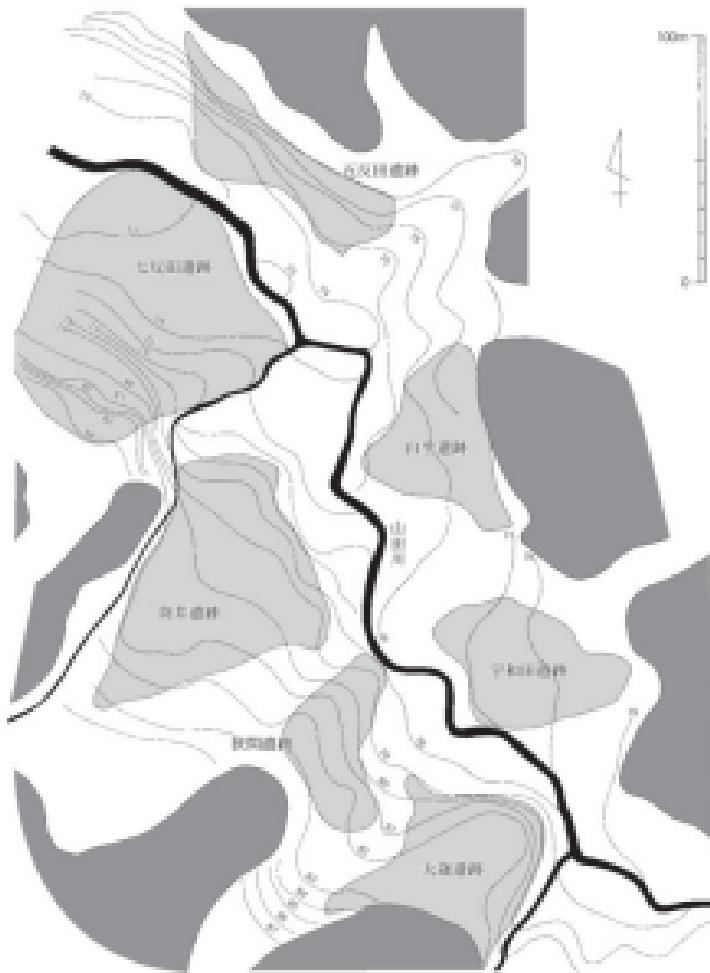


図3 国 山地地区道路の立地

この立地を詳細に観察すると、宇都道跡は小畠林地に立地している。盆地を割む丘陵部には多くの小谷が山腹斜面に向って形成されている。この小谷から噴出した堆積によって形成された小畠林地である。

一方、大曾道跡と七反道跡は、丘陵部の極端、その二次堆積によって形成された農耕地上に立地している。西道跡は、山田町側の畠地とは明らかに畠地帯が認められ、一段高い段丘面に立地しているものと思われる。

(参考文献)

- (1) 大野昭子・成瀬敏作他編『日本の地形3：近畿・中国・四国』東京大学出版社 2004
- (2) 高橋一浩・原田一也・木村清秀・飯沼仁『西日本地域の地形』培風園書房 1992

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡

山野地区道路内には、開墾された遺跡はわずかである。このような状況の中、近年、面積整理に伴う事務調査で、いくつかの道路が明らかになってきている。以下、これらの遺跡をもとに、山野地区における遺跡名とあてることにする。当地に開拓されている道路は、北から、五反田遺跡・七反田遺跡・白生遺跡・宇都御遺跡・筒井遺跡・扶間遺跡・大庭遺跡・新家遺跡・江戸遺跡・西作遺跡の12遺跡である(図4図)。以下、各道路の概要は以下の通りである。

(1) 五反田遺跡

山野町北側に位置する遺跡で、七反田遺跡の北東側、白生遺跡の北側に位置する。奈良時代から平安時代前期にかけての獨立社建物跡と溝状遺構、鍛冶時代前半の獨立社建物跡・柱穴・溝状遺構が確認できている。奈良時代から平安時代前期にかけての遺物として、縄掛陶器の小片が出土している。また、清流期の橿原郡の小片も出土している。

(2) 七反田遺跡

山野町北側に位置する遺跡で、筒井遺跡の北側、五反田遺跡の北西側に位置する。調査では明確な遺構は検出されなかつたが、平安時代後期の土器が出土している。この他、周辺土器や瓦器などを出土している。

(3) 白生遺跡

山野町北側に位置する遺跡で、宇都御遺跡の北側・五反田遺跡の南側に位置する。鎌倉時代前半の獨立社建物跡が検出されている。この他、平安時代の横形石墓・崩壊や、弥生時代後期の土器、奈良時代の圓窓器・土器なども出土している。

(4) 宇都御遺跡

山野町北側に位置する遺跡で、大庭遺跡の北東側・白生遺跡の南側に位置する。鎌倉時代前半の獨立社建物跡・柱穴・溝、室町時代の土坑・溝状遺構、江戸時代の埋め塙などが検出されている。

(5) 西作遺跡

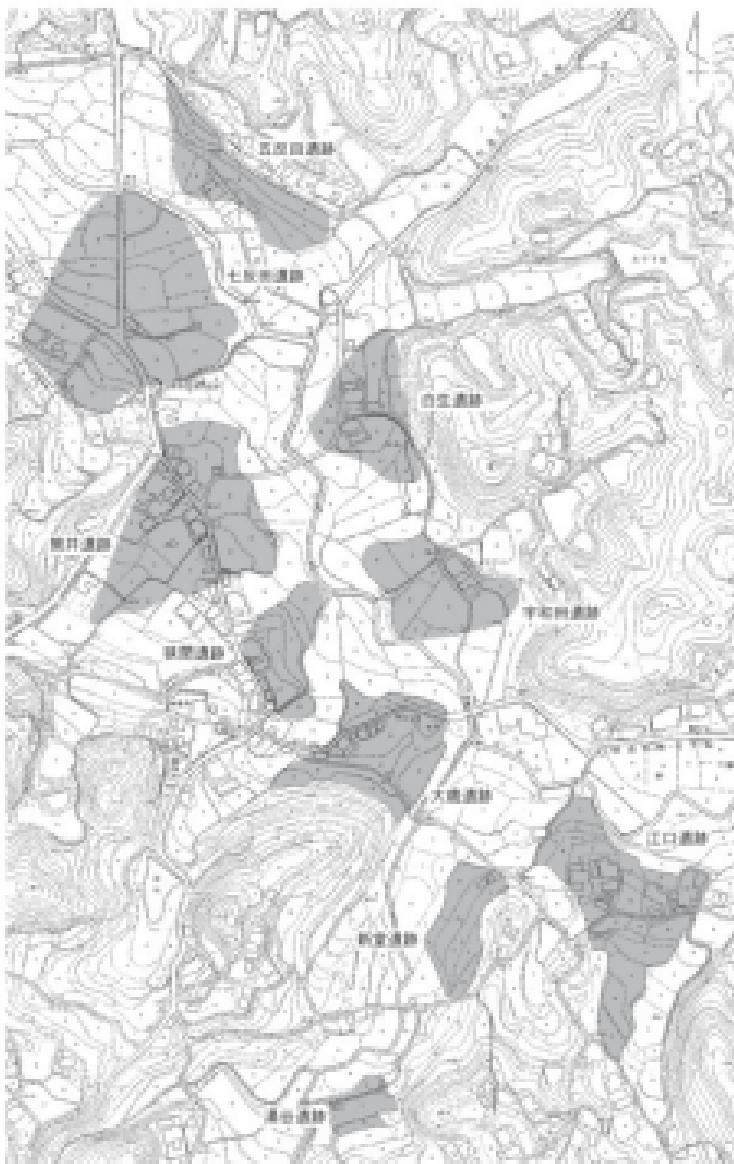
山野町北側に位置する遺跡で、七反田遺跡の南側、扶間遺跡の北側に位置する。鍛冶時代前半の獨立社建物群・柱穴・土坑・溝状遺構や室町時代の溝状遺構が検出されている。この他、江戸時代の瓦器や織部焼なども出土している。

(6) 筒井遺跡

山野町北側に位置する遺跡で、筒井遺跡の南側、大庭遺跡の北側に位置する。遺構としては



図4図 山野地区道路沿景(西側から)



第 1 图 山西地区道路

室町時代前半の調査遺跡に限られる。他に、平安時代の石器、奈良時代の須恵器・埴輪などが出土している。

(7) 大庭遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、扶桑道路の南側、宇和島道路の南西側に位置する。平安時代の獨立社建築物跡や鎌倉時代前半の独立社建築物跡、柱穴が検出されている。この他、奈良時代の石器・瓦なども出土している。

(8) 新宿遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、江口道路の南側に位置する。中世の柱穴・溝・土坑が検出されている。中世の土器窯・瓦窯・須恵器・陶器等が出土している。

(9) 江口遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、新宿道路の南側に位置する。中世の獨立社建築物跡、柱穴・溝・土坑が検出されている。

(10) 鹿野遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、山田地区遺跡の南西界に位置する。新宿道路の南西側に位置する。中世の柱穴と窓を確認している。

[註]

山田晴樹・伊藤正利「山田地区遺跡Ⅰ－昭和体育城落成整理事業－山田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－」長崎県教育委員会・長崎市教育委員会：2009

記念報外「山田地区遺跡Ⅱ－昭和体育城整理整備事業－山田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－」長崎県教育委員会：2009

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

調査地となった駒場町台町は、駒木坂駅周辺と駒場町1丁目を境に駒道町駒道町と駒場町明神と西本町安手を境に駒道町神安手町が位置し、内部交通の要衝となっている。しかし、上述の駒道町は駒場町内においては、人通り狭小で駒道町の外延が開拓された状況であった。一方、駒場町間に広がる駒道町屋敷においては、駒道町整備が計画されていた。そこで、駒道町整備と一緒にやって、駒道町を迂回する駒道町整備することとなった(図7-図)。駒道は、駒道の北側から駒道を駒道町に折りように迂回し、駒道の南側で駒の駒道に繋がる計画である(図7-図)。



图7-1 駒道整備と工事計画



図7 四工事計畫と調査位置

第2節 確認調査

今回の調査は、(一)豊原江井瀬道路改道・(二)明神宮手筋道路改道事業における実施した確認調査である。上記事業は、福岡体育城運動整備事業（福岡整備事業）建設地区と一連の事業である。当該事業に伴う分点調査・確認調査の結果、事業予定地には宇和田遺跡・大波通跡・七戸田遺跡の3遺跡が存在することが明らかとなった。このため、西本土水害調査からの結果により、本確認調査を実施することとなった。

当地区においては、福岡体育城運動整備事業（福岡整備事業）建設地区に伴い確認調査が実施されている（第8回）。当調査は、上記事業と一連のものであることから、上記の確認調査の結果に基づき、埋蔵文化財の有無を判断を行なった。確認調査は、2回にわたり、一般市民委員会（福岡路沿教育委員会）により行なわれている。各種確認調査の概要は、以下の通りである。

第1次確認調査（平成26年度）

調査主体：一般市民委員会

調査期間：平成25年10月1日～平成25年12月4日

平成26年3月19日・20日

調査担当：足立恵介（津名町町村会・埋蔵文化財調査専門職員）

調査面積：308畝（182箇所）

調査概要：山野斜面の傾斜を中心として、2×2mの調査範囲を設定し、直樹・遺物の状況を確認することを目的とした調査を実施した。その結果、山野斜面の傾斜を中心として、弥生時代から中世に亘る時期の遺物と古墳や遺跡の存在を確認した。

第2次確認調査（平成26年度）

調査主体：一般市民委員会

調査期間：平成26年3月7日～平成26年3月20日

調査担当：足立恵介（津名町町村会・埋蔵文化財調査専門職員）

調査面積：384畝（184箇所）

調査概要：第1次調査で実施しなかった範囲を対象として、2×2mの調査範囲を設定し、実施した。その結果、中世の遺物と古墳及び古跡の様式などを検出した。中世城跡である山野斜面に近く、関連する遺構の存在が想定された。



図14 地域調査点図

第3回 本発掘調査

1. 簡要

本発掘調査は、前回の確認調査の結果を受け、平成18年度に実施した。調査1回、大歳通跡→宇都御通跡→七反田通跡の順に進めていった。

また、遺構調査後、ヘリコプターにより全貌写真的撮影を、大歳通跡と宇都御通跡については平成18年11月調査時に、七反田通跡について18周年迎節日に、実施した。そして、この撮影とともに調査成果の固定化を図った。また、調査と平行して、現場事務所内にて、出土遺物の本洗を行った。

上記の調査と合わせて、調査が一段落した11月調査時に、一般市民を対象とした現地説明会を実施した。

2. 調査概要

宇都御通跡（通跡調査番号 2006040）

調査期間：平成18年10月16日～10月20日

調査面積：860m²

概　　要：山側斜面の西側に隣接する地区を調査対象とした。調査範囲に付帯調査地に隣接する地区である。調査終了後の11月調査日に墳中町の直撮影を行なった。



図9回　調査前の大歳通跡付近

大歳通跡（通跡調査番号 2006040）

調査期間：平成18年10月16日～12月25日

調査面積：400m²

概　　要：大地区(240m²)と小地区(160m²)の2地区からなる。大地区は、丘陵斜面にあたり、道路建設に伴い削平される箇所である。小地区は、以前水路であった箇所である。調査終了後の11月調査時に大地区的、12月調査時に小地区的の墳中町の直撮影を行なった。



図10回　七反田通跡の調査

七反田通跡（通跡調査番号 2006050）

調査期間：平成18年11月1日～12月25日

調査面積：800m²

概　　要：今回報告する3通跡のなかで最も広い範囲を調査対象とした。調査終了後の11月調査日に墳中町の直撮影を行なった。また、12月25日には、墳元放流を対象とした地元調査会を開催した。

3. 調査体制

調査体は、以下の通りである。

調査員：山崎清樹・瀬 真記（筑波大学人間社会文化財調査係員：准教授）

現場事務員：庄司博代



図11図 確工後の宇都御道跡



図12図 確工後の大歳通跡

第4節 整理作業

平成21年度の工期内で、全ての作業を県立考古博物館にて実施した。また、大歳通跡出土石器に関する限り、奈良市立橿原考古遺跡出土石器について、同西宮考古の坂口孟彦・宮松桂重の細野宣により、実現させていただいた。

整理体は、以下の通りである。

調査員：山崎清樹

整理担当職員：兵庫県立考古博物館調査文化財調査部整理係員

監修担当：瀬 真記

嘱託員：山崎清樹・川村由紀

第3章 調査の成果

第1節 大歳通跡

1. 通跡の位置

山田城跡の南側に位置する。内側が丘陵となり、その丘陵北側斜面を中心にはがっている。山田城跡を西と山田川の左岸にあたる。奥間通跡の南側、宇都御通跡の南西側に位置する。

2. A地区の調査

（1）概要

調査地点は本東丘陵の北側斜面にあたり（図104）。通跡面は西から東にかけて傾斜している。西端部の標高が約25m、東端部の標高が約20m、約21mの標高差が認められる。また、通跡を箇所で各通跡に伴う設置が認められる。



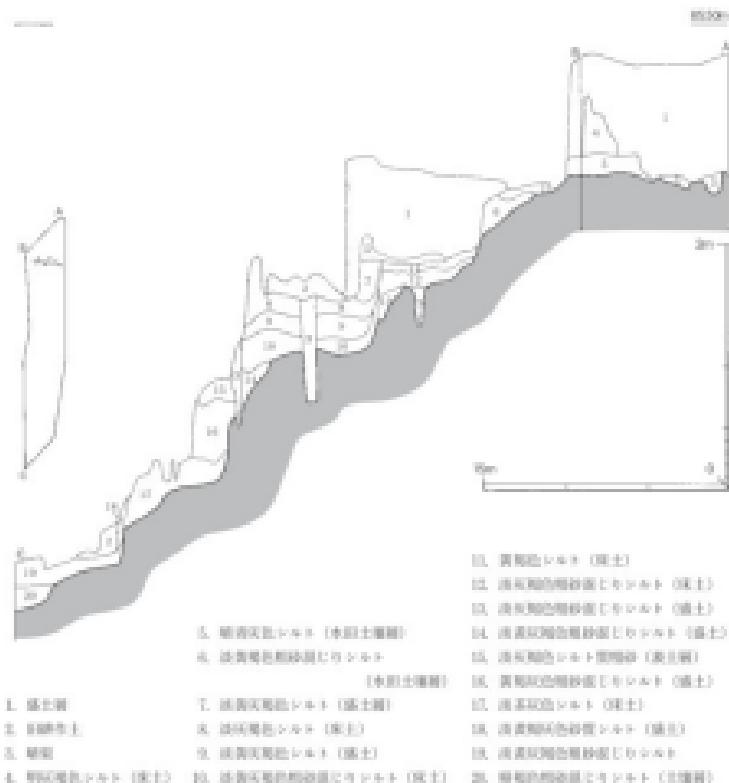
図104 大歳通跡調査位置図

(3) 预先上场的策略

古地区は、直轄領にあり、調査前までは本郷が直轄されており、直轄が明確されていた。ただし、直轄地においては、直轄監督の進行に伴い、耕作土は基本的に除島された状態であった。このため、第1回には直轄地を除いては、この直轄が実現されていない。

調査地は湖岸地にあたり、この位置標面を切り離すことにより、水頭が確認されている。このため、水頭形成前の底面土層は基本的に認められず、調査地で認められた層のはとんどは、底土層・底土層・水頭土層の第3層である。唯一、深層層に関しては、土壌化した層で、財源土層に近いものと考えられる。

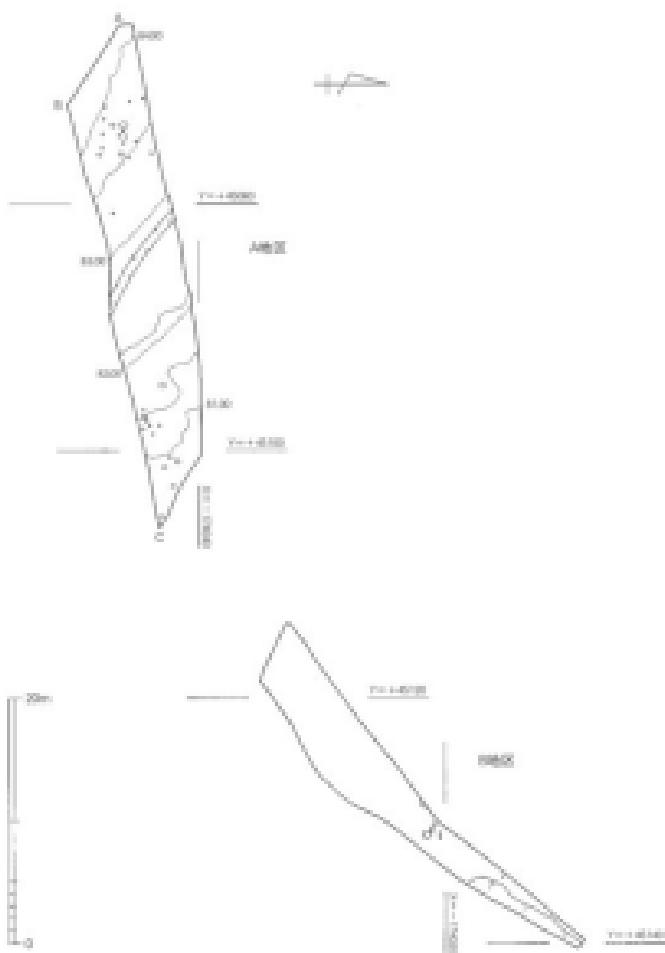
以上から、当地区においては、いわゆる難透水性地層に認められず、上記の盛土層・堆土層・本耕土層層から、土壌がわずかに出土している程度である。また、これらの層については、その範囲内および地表付近から採取して、透鏡土層と考えられる。一方舟、先端の水路構造は透鏡口跡と判断される。



第六章 大数据的存储与管理

(3) 調査の範囲

検出した道路は柱穴のみであり、調査区の西端と東端に沿って計測断面を検出した(第15図)。ただし、これらの柱穴跡から断面を復元することはできなかった。



第15図 大陸道路平図

(1) 土器類

土器と石器が出土している。いずれも通常に見るものではなく、破壊層・耕土層・廃土層からの出土である。

土器は、土器蓋の嘴(1・2)と瓦器輪(3)が出土している(図18図)。嘴は回転タイプに分類できるもので、口縁部外側が突出状をなす。

瓦器輪は、複数型に分類されるもので、内面にわずかに周溝が確認できる。外側に目開きは認められない。瓦器輪に起因する痕跡は本分野である。

石器は、チャート側面打削石器が1点(8)が出土している(図19図)。両基部に分類されるものであるが、選別打削の一端を残す。長さ2.4cm、高さ1.5cm、最大厚3mm、重さ0.8gを測る。



図18図 A地盤出土石器

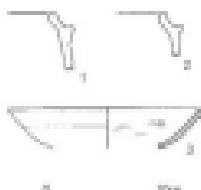


図19図 A地盤出土土器

3. B地区の調査

(1) 總観

B地区の北東部に位置する。本地区とは対照を大きく異にし、緩やかな斜傾地斜面に立地する。

(2) 基本土層(第1段階)

B地区は、A地区とは異なり、比較的平坦地に立地する。ただし、わずかに南側へ落ち込む傾向がある。このため、表面傾斜が、高い位置を差し、全般的に傾いており、この傾傾土(第1段階)が表面に土壤化し、かつ地表面から多くの遺物が出土している。この下の第2段階は第1段階と同時に埋理した層で、土壌化があまり進んでいない層と考えられ、遺物の出土層もわかる。限り無さず上の層は、人为的に埋められた層で、耕土→未土化を繰り返したものと想えられる。

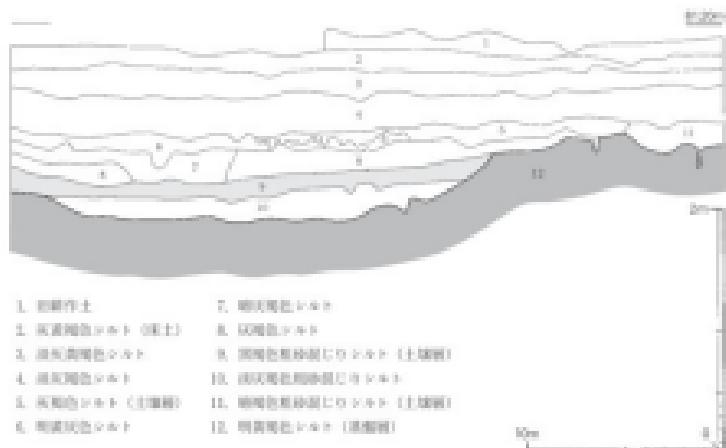


図20図 大規模調査地区基本土層図

III. 結論

通路面は調査区の面積面から面積にかけて必ずしも種類しているが、占地区は占地区ではない。調査区の面積で面積を占地区出したが、調査区の種類が悪いこともあり、面積面と叫ぶられる種類は種類ではない。西平原では面積面は全く種類を出さなかった。

10 10

士語と古語、古語が混じっている。いずれも遠西側からの出土で、遠隔に伴う通商は想定されるので、土器には、土器、陶器、瓦器、漆器、漆器、漆器、漆器が出土している(第19回)。

十面面は、圓・札・圓・圓・圓面が当主している。圓は、十面面の右側を当主している。左を除いては手づく西施院に見るもので、右側面内外面が猪子子西施院にまわし仕上げられている。また、底面内面白社主計子が加えられている。日暮圓鏡紋章によるものと見らるる通風孔、底部は直筒型である。

私たちはこの「問題」である、種々な要因によるものです。問題は問題への認知により問題に向き、それを問題によって解決されている。私たちは問題の内面化によって問題によって向き合っている。

輪郭図～10の4箇所を土している。大きさ、底面が輪郭面をなすタイプ(1)と平底面をなすタイプ(2)に分類できる。ただし、図1～10については、輪郭は問題である。柱は、高さと各の断面近似三角形の高さが貼り付けられている。底部は黒字で柱とナット調整により柱上げられ、調整は口縫内に外縫が繋げて調整により柱上げられている。柱は、頭部を平底面をなすもので、頭部から柱頭にまで切り離されている。頭部中央内縫とも同様にナット調整により柱上げられている。柱と柱も後者に分離される可視性が高い。特に10の輪郭近似形が問題である。

頭部、15の口腔器の穴が出土している。下顎に開口するもので、内外面ともヶ頭器が働き、頭蓋に口腔器外筋と筋子ヶ頭筋による仕上げられている。

頭部は特に喉の位置が強調されている。いずれも同カイアに分類されるもので、口唇部下に断面円形もしろくは方形の開口部が付いている。開口部オサキにより形成され、口唇部と合わせて、横ナマケ面により仕上げられている。体面内歯道子調整、外歯道子調整により仕上げられている。全体的に、各部を多く含む、無い動かしである。

周易·繫辭上

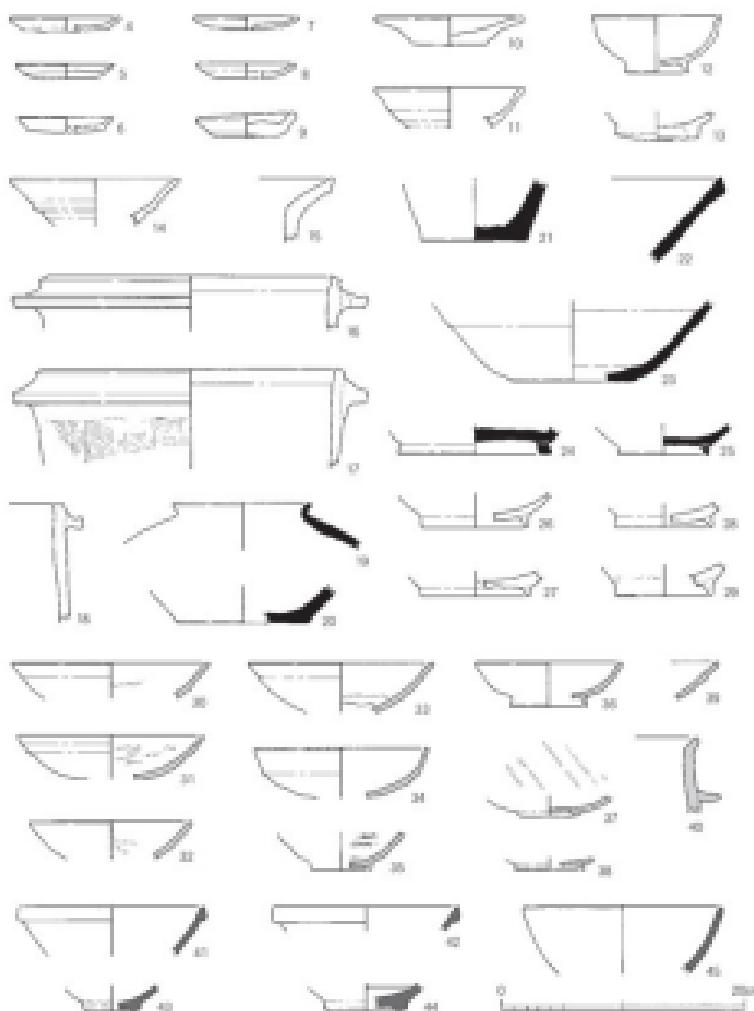
後頭、19、21、24の3個體である。頭頸は大きくて頭部に短くして、口輪部がややかく外方に突出する。内耳部と頭輪部とで頭頂には各々上昇されている。耳は、双耳聴の範囲まで、耳輪部によじ切り頭頂部に上昇している。耳は、最高点を有する頭頂部で、内耳部は頭頂より最も低くある。

図版11、底盤1120×230との組合部1221が突出している。底盤1120、1220は上部に組合部1221を切り離されている。

同时，通过与当地人民的接触，了解当地的文化和生活习惯，有助于更好地理解当地的情况。

黒色土器は、瓶が表面積に応じての削りをしている。いずれも表面のみ削りされた外層に空隙があるものである。4個とも、底面は輪廻形で結び付けられている。外層は磨きオサムと若干調整版、横ナメ調整版により仕上げられている。内面は、いずれも磨きのため詳細な調整は施されていない。わずかに瓶の内面にヘリコイドの跡跡がある。

且つ、物が時間的にいつ何が生じているか、いつでも何が生じていつまで何が生じるかで、丹波の世界では成り立つ。時間は積み重ねによって生じてゆく。全体的に成る過程が必ず一である。即ち、内



第104図 大庭遺跡日地窯出土土器

面のみに認められ、外縁に目盛られない。唯文が観察できる個体については、いずれも細網状に施され、器を輪いては、幅く施されている。器についてでは、僅より間に施されている。また、高台部窓が造形をなし、体部の立ち上がりから直線的に窓いなど、他より古い要素が認められる。また、器についても、高台の特徴が古い傾向を示している。

且頭部は頭の上側体が出土している。頭部と考えられ、円から口徑部の小片が出土している。幅2cm

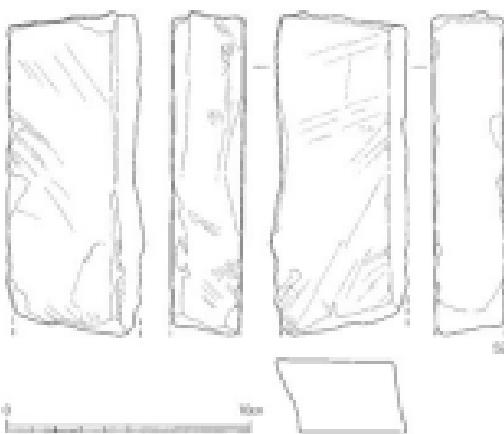


圖20図 大庭遺跡各地區出土石器

の面が磨り付ける様、種子や調整により仕上げられている。内面はナメ調整により仕上げられている。表面の研磨は不十分である。

石頭は、竹へ羽の木板を削り土しているが、いずれも背面に空洞される面である。青縞は、竹へ木板を削り土している。残存する範囲においては無て、全面に跡が剥げられている。

石頭品は、直角と右側(遮光)が残存している(圖21圖)。直角は1.9cmの1点である。直角を残し、長方形の石材の小の面を除く3面が使用されている。長さは3.6cm、幅5.5mmを測り、重さは376.7gである。

直角は、2点(B 3・B 4)出土している。B 3は、H面を残す。その直角は3.6mm × 3.6mmである。また、厚みは1.75mm、重量は45.2gである。白色系の石材を加工したもので、表面と裏面は研磨され、光沢を持つ。裏面には仕上げが行なわれず。直角の直角が強調感られる。4箇には通り穴が穿孔されている。表面に字形をなし。その径は2mm ~ 2.5mmである。B 4も、残存しないが、裏面と裏面の形状を示すものである。白色系の石材を加工したもので、表面と裏面は研磨され、光沢を持つ。残存する一端の長さは4.20mmを測り、各々上りやや大型である。重さは75.6g、直角は19.1gである。通り穴が2箇所で残存し、その径は2mm ~ 3mmである。

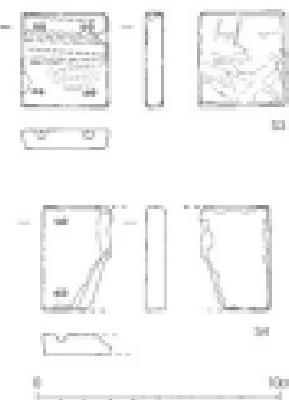


圖21図 大庭遺跡各地區出土石器

第2節 宇和田遺跡

1. 遺跡の位置

山野盆地の東側の小畠丘陵に立地する。山野町の右岸にある宇和田遺跡、白生遺跡の南側、大瀬遺跡の北東側に位置する。



図24 宇和田遺跡調査位置図

2. 調査の概要

(1) 碑面

複数した遺構即ち穴、土坑、溝状遺構に割り込まれる。これらの遺構は、調査区北半部と中央部に集中する傾向が認められる。南側では明治時代以前と考えられる土壁を基準として複数したに認られる(図25)。

(2) 基本土層

調査区周辺は耕層整備のため、耕作土は取り除かれていた。このため、当遺跡の基本土層は、上から、廻上層・基礎層の2層に割りられる。このため、砕石在遺物箇所は認められなかった。

廻上層は、灰褐色細砂からなり、頂部から底部の厚さが認められた。断続的に確認すると、さらには粗粒に分離することが可能である。基礎層は、灰褐色シルト混じり細砂一層かとなり、表面の上面で遺構

を検出した。調査層上面の標高は、北端部で19.48m、南端部で19.24mと、内側へ傾斜している。時に、調査区内の大半はほぼ平坦で、海浜部付近で微細な標高が現くなっている。

(3) 通路と通物

① 通路

北東部で柱状検出したが、植物を確認することはできなかった。また、柱穴内からは土壌が抽出していなかったため、時期の特徴も同様である。

② 土坑

上層段階している。

③ KII

調査区中央部に位置する(第20図)。S D03の南側、S D04の北側に位置する。他の通路とは切り合った形ではなく、連絡する。平面圖は複円形なし、その面積は1.25m × 1.25mである。構造圖は現存形をなし、調査層に沿する横断面からの深さは50cmである。

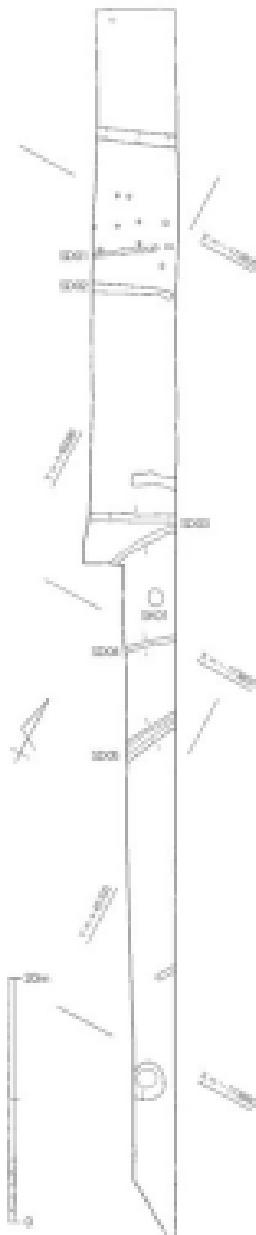
通物は土壠部の小窓が1箇所1つ設置している。横断面に上るもので、底部は同配筋開口により切り離されている(第21図)。

④ 池

上層段階している。

⑤ D01

調査区北端に位置する(第22図)。北東～西北方向に伸びる溝で、北東端は調査区内で収束し、西北端は調査区外へ伸びている。検出した長さは150cmで、横断面における幅は37cmを測る。構造圖は現存形をなし、調査層における横断面からの深さは10cmである。埋土は、2箇所からなるが、人為的に埋められている。



第22図 宇和島通路平面図

3-D8

調査区中央部に位置する(図248)。北東一西方向に伸びる溝で、両端とも調査区外に伸びている。平面上に日向面で突出部が大きく異なるが、凸面の大半が根本部の影響を受けていることに起因するものと考えられる。

標高は17.0mで、中央部における傾斜幅は2.0mを測る。横断面は逆行形をなし、底部面における傾斜幅からの差は1.0mを測る(図248)。

埋土は、古層からなる。最下層の第1層は自然に堆積した層で、腐植物が多く含まれていた。他の層についても、その層から人為的に埋められたものと判断される。

溝内からは、土壤層と骨層が出土している(図248)。土壤層は、小細孔隙層が出土している。

小細孔隙層と第1の空隙層で、いずれも堆積形態によるものである。底層はいずれも同配出切りにより埋り離れていた。他の回配出切りにより仕上げられ、底層表面は仕上げナイフが認められる。

他層は、第1の空隙層が出土している。いずれも、溝内外面がナガ調整。底層からの表面においての変遷区外面が凹字サヨとナガ調整。口縁部外面が凹字サヨ調整により仕上げられている。

開口部は、埋・明石床と考えられる跡跡が右側部で、右側土している。内部には日本を1半島とする即ち目が施されている。

これらの火封土遺物から、18世紀代に復調付けられる。



図248 3-D8断面図

3-D9

調査区南半部、3-D8と3-D10の中間に位置する(図249)。北東一西方向に北面直線的に伸びる溝で、両端とも調査区外に伸びている。突出した長さは1.0mで、横断面における幅は1.0mを測る。横断面は逆行形をなし、最深部における傾斜幅からの差は1.0mである(図249)。

埋土は山形地層色サヨトノ細孔隙層からなり。その層から堆積して、人為的に埋められたものと考えられる。

通槽内から土器は出土しない。埋土の特徴から、江戸時代後期と考えられる。



図249 3-D9断面図

3-D10

調査区南半部に位置する(図250)。北東一西方向に北面直線的に伸びる溝で、両端とも調査区外に伸びている。突出した長さは1.0mで、横断面における幅は1.0mを測る。横断面は逆行形をなし、最深部における傾斜幅からの差は1.0mである(図250)。埋土は自層からなり、1層と2層は人為的埋められていた。

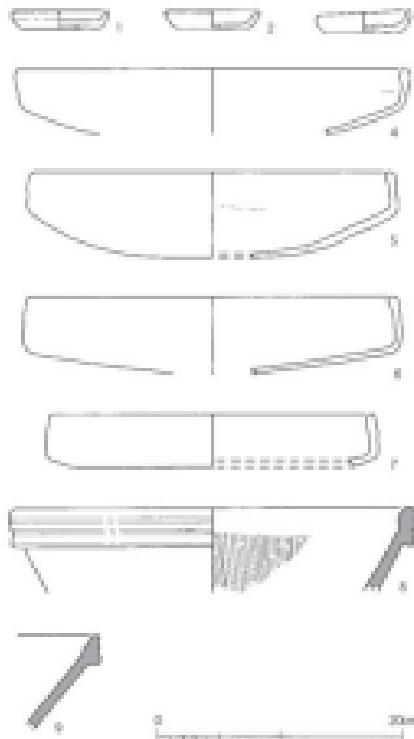
通槽内から土器は出土していない。埋土の特徴から、江戸時代後期と考えられる。

例：その他の

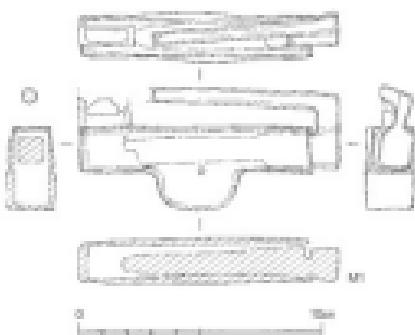
包合部から縫合が1点(M1)固定している(第20図)。此が窓仔するが、社金具の底面と孔底と社金具の接觸距離を失く。社金具は、不正確な圓凸形をなすもので、その幅は3.0mm、高さ5mmを測る。また、その厚みは5mmである。社金具の底面は断面が径6mmの円形で、T.10mm規制する。接觸の面と裏面の端は溝状に削り込まれ、それぞれの長さは、L10mm・L20mmである。また、社金具外端の一端に圓の打痕が認められる。



第20図 3D復元図



第21図 宇都御道跡土器



第38図 宇和四通砖土壁

第3節 七反田道路

1. 道路の位置

山野筋地の北側、山野筋の左岸に位置する。五反田道路の西側、岡井道路の北側に位置する。



図29 四 建工後の七反田道路（東から）

2. 調査の結果

(1) 概要(第3回)

横走した道路は獨立地物筋、柱穴、調査筋に囲まれる。調査筋は西側から東側にかけて傾斜しているため、東端部で横走されたのは調査筋に閉じられ、調査社道路と柱穴は中央部より西側に閉じられる。上記以外に、土間筋の邊樋も検出しているが、北側が出土せず、時期の明確はできなかった。



図30 四 七反田道路調査位置図

(2) 基本土壌(第2回)

本通過においても、施設整備工事後に調査を行ったため、耕作土はほとんど残っていなかった。このため、調査図には耕作土はほとんど描画されていない。調査地は植樹地であるため、表面から底面にかけて植樹しており、一部木理造成のため、削平を受けていた。特に、調査区東端部は、整地に盛り込み、調査地が埋積していた(第1回)。他の箇所については、全体的に表面土壤→底土が翻覆された面からなる。一方、耕作土と考えられる面層は土壤化された面(第2回・12回)が認められた。高樹地は、明黄色からトカラ色る。一方、低樹地に認められる細緻な、トカラ色の細胞筋の埋め戻したものである。

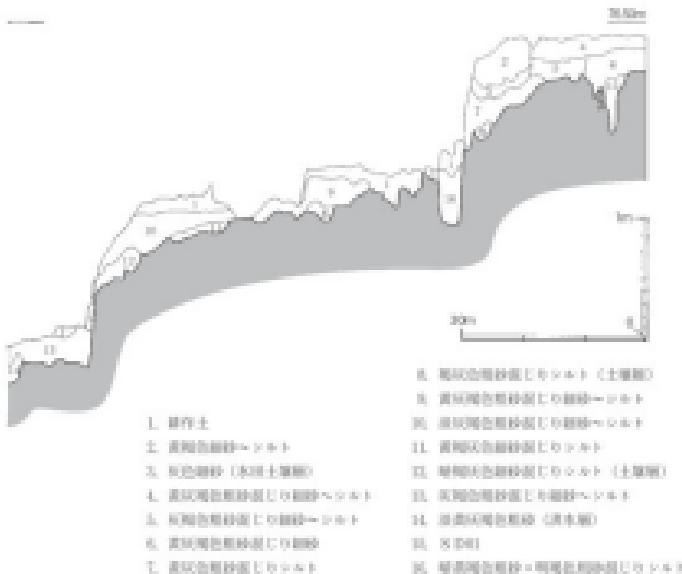


図2回 七段通過路基本土壌図

(3) 通構と通物

1.1 通構と通物

1種(8回00)を検出した。調査区中央部に位置する(第2回)。通構の植物と考えられるが、一部は調査区外へ延びている。南行方向(P 2 → P 8)は2回で、北行方向(P 8 → P 2)で2回を検出している(第2回)。南行方向の距離は3.65mを測り、北行方向P 2 → P 8間の距離は4.30mである。P 2 → P 8を基準とした植樹方向は、N33°20' Eを示している。柱穴の平面形は円形を基本とし、その範囲は24cm×36cmを測り、柱頭部からの深さは12cm～27cmである。なり。柱頭は挖出されなかった。

通構は、P 1より土面の間に(8)が出土している(第2回)。植樹成形によるもので、内外面とも斜面にて調整により往上げられている。

以上から、調査時代に抜き付けられる。

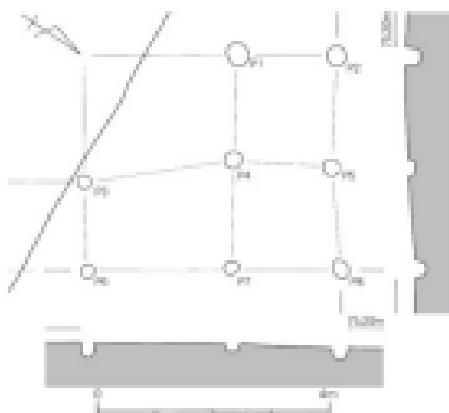


図38-1 索目時

図38-2

P-1

調査区西端部に位置する(第38図)。

直面幅が1点(10cm)としている(第38図)。柱型瓦面端に外側されるもので、外端は腰オナ・ヒ止木或モレ、口縁部が腰ナガ調整により仕上げられている。底盤には軒高差鉢形の高台が取り付けられている。高台高は約2から3cmである。全般的に堅城が施しつか、内側にわずかに粗文が認める所る。

図38-3

調査区中央部に位置する(第38図)。

上面端の輪もしくは腰の腰脚付が出土している。腰脚の取組から、日式後半の特徴を示している。

図38-4

索目時

調査区西端部に位置する(第38図)。柱接頭部方に伸びる溝で、両端とも調査区外へ伸びている。横出しした長さは7.10mである。平面形は、北側へ傾斜しているためその形状は一辯ではなく、中央部における複数面の幅は2種類を認める。後述するように腰脚削が行なわれた結果、中突頭が上手間に盛り上がり、その両側が腰高差鉢形状に盛り込まれ

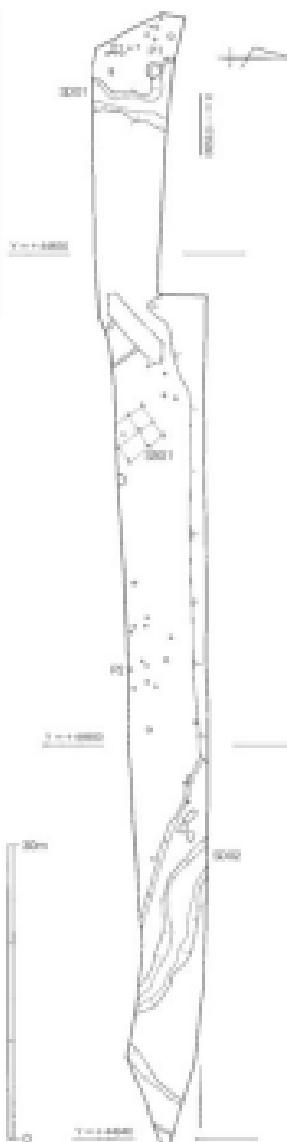


図38-2 七段階遺跡平面図

ている。底面における複数層からの厚さは、約6mである。地形的に北側へ傾斜しており、西側も北側へ傾斜していた。

埋土は3層からなる複数層だが、2層にわたり剥離が行われている。つまり、まず1層下部のライムまで剥離され、これが海水により埋没後、4層下部まで再剥離されている。4層と3層が海水により埋没後、3層が土壤化している。その後、1層と2層が人为的に埋められていた。

遺物は、廻遊魚の骨などの種類だけと土壌層の小片が出土している。廻遊層について日本海の方へ埋没できなかった。土壌層については遺物の特徴も同様である。

以上の出土土器から、古墳時代に坑窓が作られる。

5 D区

調査区東部に位置する(図34図)。東西方向に進行方向にのびる廻遊で、南端とも調査区界へ伸びている。検出した土器は1個程度で、廻遊面における層は1段のみを有し、横断面は逆台形をなす。廻遊層における複数層からの厚さは、1層のみである。また、底層のレベルから、東側へ流れていたものと判断される。

埋土は3層からなる複数層だが、大きく3層にわたり剥離が行われている。まず、1層下部まで剥離されている。これが海水により埋没後、4層下部まで再剥離されている。4層と3層が海水による埋没後、再び2層下部のライムまで剥離されている。最後に1層と2層が埋めし、完全に埋没している。

遺物は、廻遊層の表と1点だけ出土している(図34図)。廻遊層の底層と考えられ、底層はナマコ層により仕上げられている。体表面は下端が低いハラ脚で、廻遊層ナマコ層により仕上げられている。内面は全て同軸ナマコ層により仕上げられている。また、廻遊内面には所かおりが認められる。

この他、廻遊層の表の体表面と土壌層の間の隙間に粒状物が出土している。土壌層の層は、外側が叩き成形に

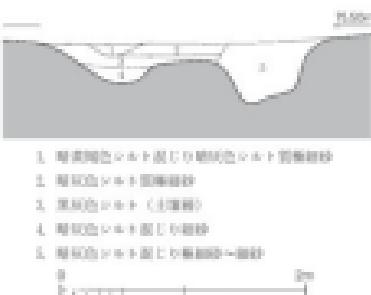


図34図 S-5D剖面図

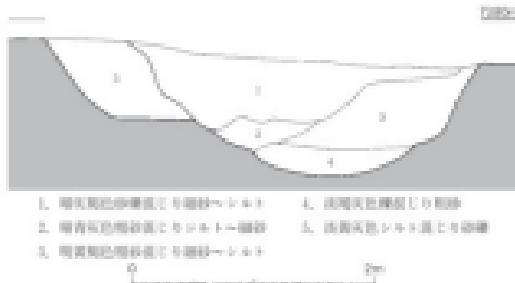


図35図 S-D剖面図

より往々上げられている。いずれも手斧のため圓化できなかった。

以上の出土土器から、平安時代に被覆付けられる。

四：陶内器

土器と石器が出土している。

土器は、陶器類・黑色土器・褐陶器が出土している(図30図)。

陶器類は、壺・瓶・盃・盤が出土している。壺は1と2の2種類で、1の底面は円錐形へう開口により往々上げられている。また、2の外表面には次擗紋が認められる。盃は、3の1個体である。底部を中心で残存するが、軸に内面は略の片口が認める。盤は、4の1個体である。盤口は、5の1個体が付いている。軸口の面と考えられ、口縁部は切削する。盤口部裏面の複数の1個体(6)が出土している。底面は平底占の直腹を残し、回転系切口に浅く切り離されている。

黑色土器は、7の壺1個体である。内面の凸面をした内面に分離されるものである。内面にわずかに環状の痕跡が認められる。外表面は凹字平とナメ調整により、口縁部は櫛ナメ調整により往々上げられている。口縁部内面はわずかに光澤感をなす。

褐陶器は、圓錐の口縁部片口が出土している。口縁部に附して直立する指面を有するタイプで、直面に分離があるものである。

石器は、サモカイト質の打製石器が1点(8)が出土している(図31図)。四葉式に分離されるもので、先端と運河の一部を突く。残存長2.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.3kgを測る。



図30図 黒土器類

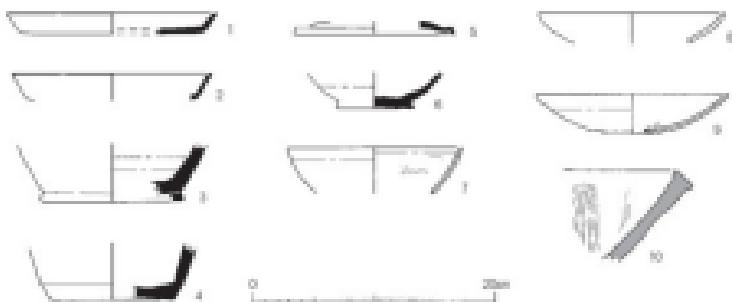


図31図 七段階遺跡出土土器

第6章　まとめ

以上、大街道路、宇都御道路、七ツ川道路の3道路について、報告してきた。以下、3道路について簡単にまとめ、本稿物のまとめとしたい。

大街道路では、桂川以外明確な道標を残すことができず、出土遺物は佐久間に限られる。平安時代初期の遺物が中心である。この中で特筆あるのが、石器の出土である。石器については、理有個人との関連を想起させるものである。2点とも、石器の魔力としては大型の面板であり、高品質面板とされる白色系の石材が使い込まれ、兎糞を有する。これからの特徴から、平安紀から鎌倉紀にかけてに位置付けられるもので、当道路は土著の時期と一致するものである。しかし、本道路の調査からは、以前の調査を含めて、石器と関連するような遺構は検出されていない。

唯一考えられるのが、当道路の地理的範囲である。延暦三年（784）完成の「正倣の御経院」に施内の往還道が記されている（第4回図）。ここに、往還道のひとつとして、郡家西村（駿河郡市郡家）と国ヶ村（現渋沢町役割西）を結ぶ中街道（中通り）が記されており、この往還道が山野地区を通過している。同様的に、尾澤西郡家から尾澤町を通り山野に至り、吉野村（現日野町吉野）・尾澤本町吉野に接している。このルートは、律令時代における後藤御守と伴名御守等には直接的に接るもので、この時代まで遡る可能性を示すものである。

以上から、当地に御守御の跡らかの遺構があり、史料性も考えられるのではないかであろう。

宇都御道路は、岡谷改修が確実の終点軍に位置するため、江戸時代の上級・裏抜道路が検出され、当地の遺物が出土しているのみである。この中で調査されるが、鐵器の出土である。時代的には古くはないが、数少ない出土例と位置付けができる。

七ツ川道路では、奈良時代の土・埴輪跡を検出した。当道路の周辺地も、道路の北側各道路に接続するため、検出された遺構は限られている。地形環境からみて、調査地の範囲に道路の中心があるものと想われる。

〔参考文献〕

- 平野透彦「平安京の石器御守とその歴史」『研究記録』第7号・財團法人 文部省埋蔵文化財研究所 2001
武田晴香「近世の御路社屋」『歴史の道調査報告書』第六集 御路御守・御路道口・御路道口・兵庫県教育委員会 1996



図24 江戸時代の街道

白土上层带布点表(1)

| 道路名 | No. | 地层名 | 土壤剖面 | 颗粒 | 砾石 | 厚度 cm | 厚度 cm | 厚度 cm | 地层叙述 |
|------|-----|------|------|------|----|----------|----------|----------|-------------------|
| 大路道路 | 1 | A 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 0.50 | | | 0层厚0.5cm |
| 大路道路 | 2 | A 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 0.50 | | | 0层厚0.5cm |
| 大路道路 | 3 | A 地区 | 粗沙层 | 圆圆 | 砾 | 10.00 | 3.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 4 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 0.50 | 1.00 | 4.70 | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 5 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 7.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm, 粗沙1.0cm |
| 大路道路 | 6 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 7.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm, 粗沙1.0cm |
| 大路道路 | 7 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 8.00 | 1.00 | 3.00 | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 8 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 7.00 | 1.00 | 3.00 | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 9 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 7.00 | 1.00 | 3.00 | 0层厚1.0cm, 粗沙1.0cm |
| 大路道路 | 10 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm, 粗沙1.0cm |
| 大路道路 | 11 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 12 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm, 粗沙1.0cm |
| 大路道路 | 13 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 7.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 14 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 15 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾 | 5.00 | | | 0层厚0.5cm |
| 大路道路 | 16 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾圆 | 20.00 | 4.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 17 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾圆 | 24.00 | 8.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 18 | B 地区 | 粗沙层 | 土质圆 | 砾圆 | 2.00 | | | 0层厚0.5cm |
| 大路道路 | 19 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 10.00 | 5.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 20 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 5.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 21 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 5.00 | 1.00 | 4.00 | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 22 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 7.00 | | | 0层厚0.5cm |
| 大路道路 | 23 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 6.00 | 10.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 24 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 2.00 | 12.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 25 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质圆 | 砾 | 2.00 | 7.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 26 | B 地区 | 粗沙层 | 砾质土圆 | 砾 | 2.00 | 6.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 27 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 2.00 | 6.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 28 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 2.00 | 6.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 29 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 2.00 | 7.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 30 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 31 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |
| 大路道路 | 32 | B 地区 | 粗沙层 | 黑泥土圆 | 砾 | 10.00 | 1.00 | | 0层厚1.0cm |

白土上路種植表(2)

| 道路名 | No. | 地圖名 | 溫帶名 | 類別 | 面積 ha | 面積 ha | 面積 ha | 面積 ha | 面積 ha |
|-------|-----|-----|-----|------|----------|----------|----------|----------|----------------|
| 大湖道路 | 33 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | 15.00 | 6.00 | | | 口湖里1/4 |
| 大湖道路 | 34 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | 14.00 | 5.20 | | | 口湖里1/3 |
| 大湖道路 | 35 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 3.00 | 1.20 | | 底湖1/3 - 旗尾1/3 |
| 大湖道路 | 36 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | 11.70 | 5.00 | 4.20 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 大湖道路 | 37 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 1.20 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 大湖道路 | 38 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 1.00 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 大湖道路 | 39 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 3.00 | | | 口湖里1/3 |
| 大湖道路 | 40 | 白湖區 | 白湖 | 白湖上面 | 15.00 | 6.00 | | | 口湖里1/3 |
| 大湖道路 | 41 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | 15.00 | 6.00 | | | 口湖里1/3 |
| 大湖道路 | 42 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | 15.00 | 6.00 | | | 口湖里1/3 |
| 大湖道路 | 43 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 2.20 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 大湖道路 | 44 | 白湖區 | 白湖 | 白湖 | | 2.00 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 大湖道路 | 45 | 白湖區 | 白湖 | 青稻 | 15.00 | 6.00 | | | 口湖里1/3 |
| 宇和田道路 | 1 | | 宇和田 | 田 | 2.00 | 1.00 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 宇和田道路 | 2 | | 宇和田 | 田 | 2.00 | 1.00 | 4.00 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 宇和田道路 | 3 | | 宇和田 | 田 | 2.00 | 1.00 | 4.00 | | 口湖里1/3 - 旗尾1/3 |
| 宇和田道路 | 4 | | 宇和田 | 稻田 | 30.00 | 5.20 | 30.00 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 宇和田道路 | 5 | | 宇和田 | 稻田 | 28.00 | 7.00 | 28.00 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 宇和田道路 | 6 | | 宇和田 | 稻田 | 28.00 | 6.20 | 28.00 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 宇和田道路 | 7 | | 宇和田 | 稻田 | 28.00 | 4.00 | | | 口湖里1/3 - 旗尾1/3 |
| 宇和田道路 | 8 | | 宇和田 | 稻田 | 22.00 | 4.00 | | | 口湖里1/3 |
| 宇和田道路 | 9 | | 宇和田 | 稻田 | | 2.00 | | | 口湖里1/3 |
| 七反田道路 | 1 | | 七反田 | 稻田 | 17.00 | 1.20 | 14.00 | | 口湖里1/3 - 道頭1/3 |
| 七反田道路 | 2 | | 七反田 | 稻田 | 18.00 | 1.20 | 15.00 | | 口湖里1/3 |
| 七反田道路 | 3 | | 七反田 | 稻田 | | 1.00 | 11.00 | | 底湖1/3 |
| 七反田道路 | 4 | | 七反田 | 稻田 | | 0.20 | 11.00 | | 底湖1/3 |
| 七反田道路 | 5 | | 七反田 | 稻田 | 15.00 | 1.20 | | | 口湖里1/3 |
| 七反田道路 | 6 | | 七反田 | 稻田 | | 1.20 | 4.00 | | 底湖1/3 |
| 七反田道路 | 7 | | 七反田 | 稻田上面 | 14.00 | 1.20 | | | 口湖里1/3 |
| 七反田道路 | 8 | | 七反田 | 土田 | 15.00 | 1.20 | | | 口湖里1/3 |
| 七反田道路 | 9 | | P1 | 白湖 | 白湖 | 15.40 | 3.20 | 4.00 | 底湖1/3 |
| 七反田道路 | 10 | | 七反田 | 稻田 | | 2.00 | | | 口湖里1/3 |

| 地圖 | 標高 | 地土 | 面積 | 種類 | 面積 |
|-----------|------|----------------------------------|----------------------|----|----|
| 國～國自 | | 露石・在樹林中に分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國～國自 | | 露石・在樹林中に分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國自～國自 | | 露石 | | II | |
| 國國～國 | | 露石・在樹林中多く分布 | 面積の幾倍不十分。樹 木の影響不可 | II | |
| 國自～國國 | | 露石・在樹林中多く分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國自～國自 | | 露石・在樹林中多く分布 | | II | |
| 國自 | | 露石・在樹林中多く分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國國～國自・國樹 | | 4m以下の露石・チート・赤葉樹木 分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國 | | | | II | |
| 國自～國 | | | | II | |
| 國～國自 | | | | II | |
| 國自 | | | | II | |
| 國半甲～下 | | | | II | |
| 二三五・國樹～國 | | 露石・チート・石炭層・中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國～國國國 | | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國國國～二三五・國 | 露石 | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 二三五・樹～國樹 | 中等樹木 | 4m以下の露石・チート・赤葉樹木・露 石・在樹林中多く分布 | | II | |
| 國國國～一國 | | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國國～國 | | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國國國～國國國 | 中等樹木 | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國國～國樹 | 中等樹木 | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國國～國 | 中等樹木 | 露石・チート・石炭層・中等に中等 に生する樹木分布 | 面積の幾倍不十分 | II | ? |
| 國～國國 | 中等樹木 | 露石・在樹・チート・中等に中等 に生する樹木分布 | | II | |
| 國～國國 | 中等樹木 | 露石・在樹・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國國～國 | 中等樹木 | 露石・チート・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國～國自 | 中等樹木 | 露石・在樹・チート・中等に中等 に生する樹木分布 | | II | |
| 國～國樹 | 中等樹木 | 露石・在樹・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國～國自 | 中等樹木 | 露石・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國國～國國 | 中等樹木 | 露石・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國國～國樹 | 中等樹木 | 露石・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國國～國國 | 中等樹木 | 露石・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國國～國樹 | 中等樹木 | 露石・中等に中等に分布 | 露石・樹木 | II | ? |
| 國自 | 中等樹木 | 露石・チート・在樹林中分布 | 面積の幾倍不十分 | II | |
| 國自～二三五・樹 | | 露石・中等に中等に分布・石炭層 と分布 | 面積 | II | |
| 二三五・國樹～國樹 | | 露石・チート・樹木・中等に中等 に分布 | | II | |
| 國國～國樹 | | 露石・在樹林中分布 | | II | |
| 二三五・樹～國樹 | 中等樹木 | 露石・チート・中等に中等に分布 | | II | |

報告書抄録

写 真 図 版

写真図版 1 遺構

大塚遺跡



A地区遺構 壁から



④地区全図 転写



④地区全図 転写

写真図版 3 出土遺物

大塚遺跡



6



7



8



9



10



11

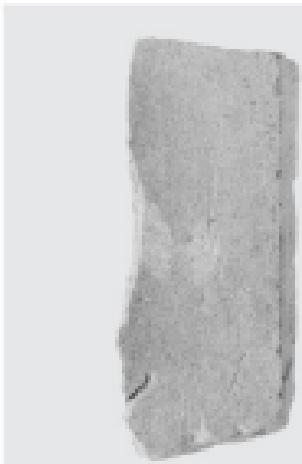


12

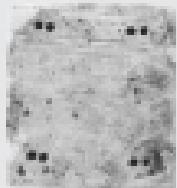
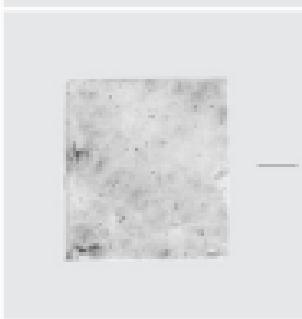


13

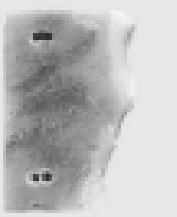
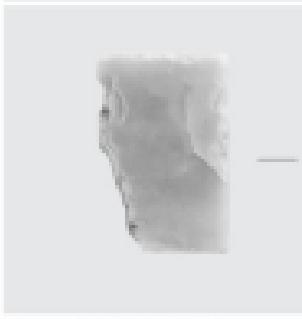
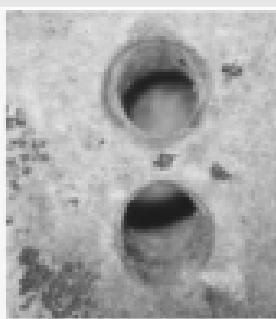
6・7・10・11・12・13：大塚遺跡出土土器 8・9：大塚遺跡出土石器



5.2



5.3



5.4



5.1～5.4：既往発達土石製品

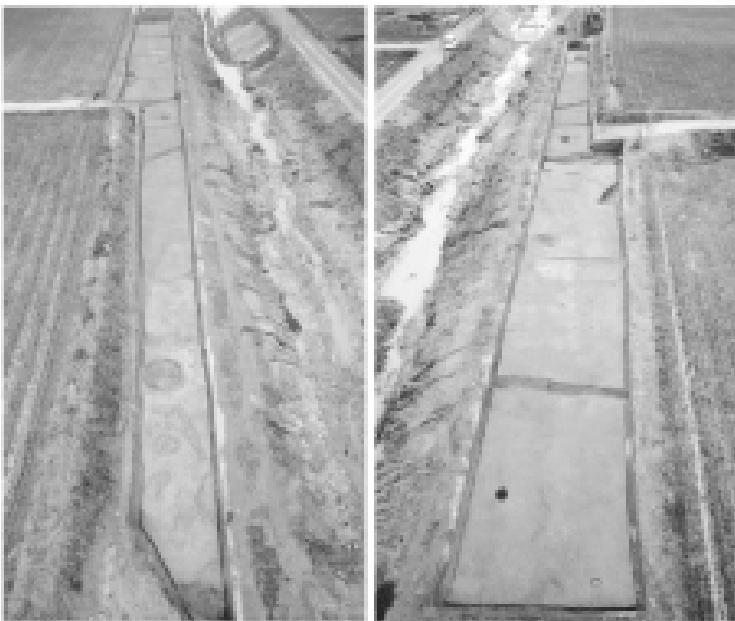
写真図版5 遺構



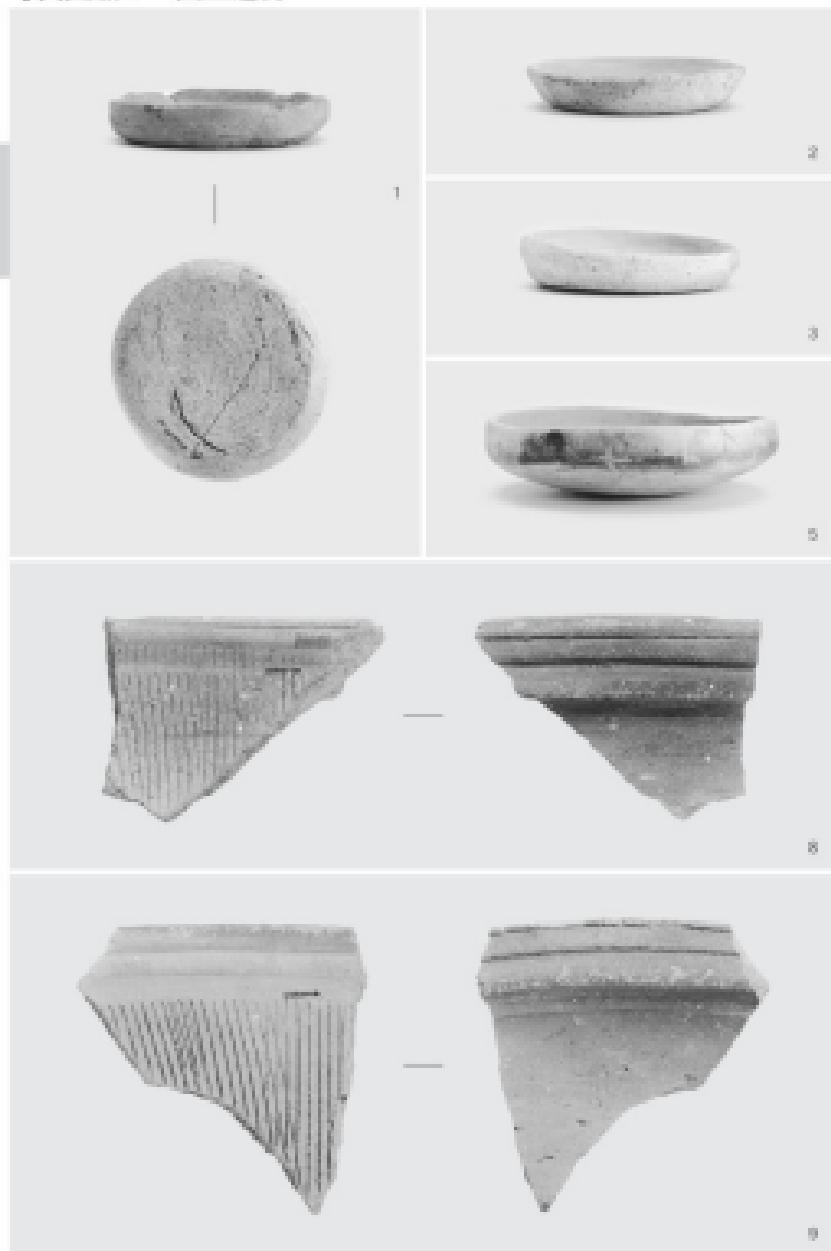
全景：面上空から



全景：北上空から



写真図版7 出土遺物



I : 5000出土地圖 I : 2・3・4・5・6 : 5 D 500出土地圖



図 8

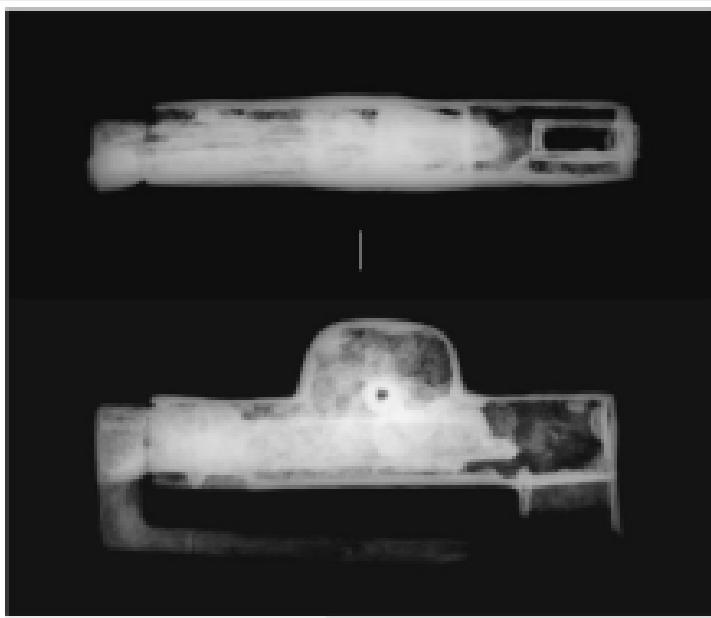


図 8 : 括弧風古玉曲頭製品

写真図版9 遺構



金剛 東上塗から



金剛 北上塗から

全圖 北側から



七反田遺跡

西半部全圖 南から



写真図版11 遺構



S1001 墓から



S1001 墓から



S1002 墓から

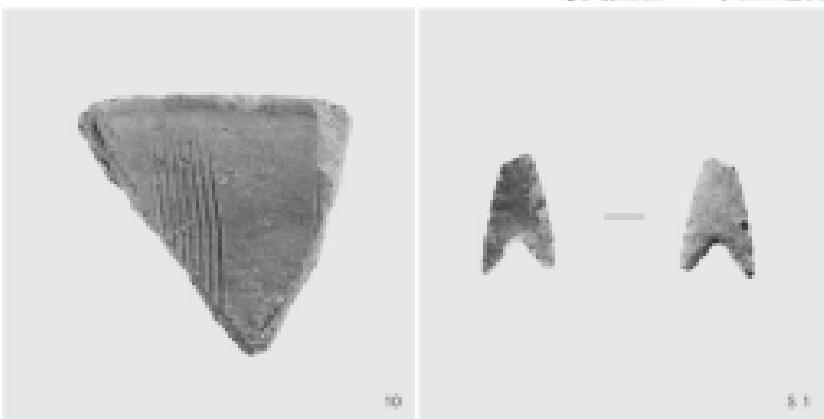


図12 駒鹿層出土石器 5.1：駒鹿層出土石器

関連の文化財調査報告書

茨城県

山田地区道路Ⅲ

(一)関連する道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月24日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒653-0442 神戸市垂水区大中1丁目1番1号
TEL 078-437-5689

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8563 神戸市中央区下山手通1丁目10番1号

印　刷　株式会社ソーエイ
〒653-0608 神戸市垂水区6番6号

